

四国八十八か所巡り、いわゆる四国のお遍路がある。
徳島の1番札所から始まり、高知、愛媛を廻り最後に香川の88番札所までの
壮大な遍路道だ。歩きの人、ウルトラランナーも一度は回ってみたいと思う道。

遍路道は「順打ち」と言って1番から番号順にお寺を回る（＝打つ）のが一般
的だが、「逆打ち」と言って88番から1番へと回る方法もある。
逆打ちは順打ちの3倍苦労すると言われる。なぜかと言えば遍路道は順打ちに
合わせてあるからだ。たとえば遍路道を案内する案内標識が順打ち仕様だ。次
の札所までの距離は順打ちの次の札所で、逆打ちの札所を書いているのではな
い。書いてあっても「前の札所」までのように見えてしまう。

案内標識の文字程度ならそう問題にならないのだが、問題は標識の存在である。

図1

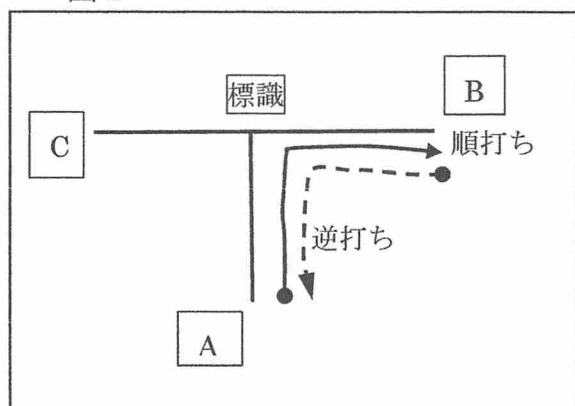


図2

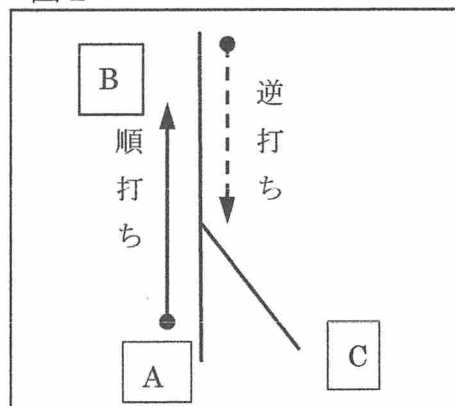


図1の場合

AからBに行く順打ちの時、T字路の正面に標識があり見つければ素直に右に
曲がりB方向に行ける。シンプルな話だ。T字路にぶつかりどちらに行くのか
思ったときに、標識が見当たらなくてもどちらだろうと最低思うだろう。
これが逆打ちの時は別世界の展開になる。Bから進むがT字路の交差点で標識
を見つけて左折してA方向に行けるだろうか。標識は薄いもので、逆打ち用に
こちらに向いてくれない。「もうすぐ左折する」と意識出来ていたら可能かもし
れないが、それでもT字路になるたびに標識を探さなくてはいけない。左折を
意識していなければ、どこまでもコースアウトが続く。

図2の場合

順打ちの場合は、交差点の存在も知らずに進めるが、逆打ちの場合は、図1と
逆で交差点ごとに悩んでしまう。案内標識はもちろん無い。遍路道は順打ちの
世界だから。(最近では青看板の逆打ち案内も見かける)